

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 11 日現在

機関番号：32402

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24530598

研究課題名(和文)健康・環境リスクをめぐる不安言説分析：その連鎖と強靱さに関する実証研究

研究課題名(英文) Sociological analysis on lay people's anxiety about environmental and health risks

研究代表者

柄本 三代子 (Enomoto, Miyoko)

東京国際大学・教育研究推進機構・准教授

研究者番号：90406364

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：主として質的調査を軸とした実証研究を行い、健康や環境に関するリスクを人びとがどのように理解/認知し、生じた「不安」をめぐるどのように対処しているのか/していないのか、またそれらをマスメディアがどのように報じたかについて、一定の知見を得た。

日常生活の中でのリスク認知と対処の方法はさまざまな社会的要因と連動し、専門家による説明だけで不安は払拭されない。「科学的正しさ」と「市民」をめぐる前提について問いなおした。

研究成果の概要(英文)： Quantitative research has resulted in several important findings about that how lay people understand, accept, and cope with health and environmental risks and how mass media report on the same.

Lay people's risk perception and methods of coping are connected with various social factors, and their anxiety is not alleviated only by "correct" explanations by experts. As a result, this research re-questions the premise "scientific-correctness" and the idea of "citizenship."

研究分野：社会学

キーワード：リスク 健康 環境 科学 不安 身体 食 言説

1. 研究開始当初の背景

(1) リスク言説をめぐるコミュニケーション

健康や環境をめぐるリスク言説において、それを一コミュニケーション過程にとらえるなら、専門家のみならず、当該リスクに関して専門家ではない一般の人びとの言説も重要な位置を占めている。リスク言説空間を構成するという意味において、社会学的立場としてはそれらの知の、少なくとも「優/劣」あるいは「合理/非合理」を前提とはしない。しかし、そのようなリスク言説全般に対して「科学的正しさ」あるいは「正しい理解」が強く求められているのが現状である。そこで見落とされているものについて着目することには現代的意義があるのではないだろうか。

健康や環境にかかわる何らかのリスクについて、消費者/国民の知るところになるのは、マスメディアによる場合が多い。いわゆる政府主導の「リスクコミュニケーション」過程においても、マスメディアの果たす役割は大きいものとみなされている。したがって、報道の仕方に対しては、「風評被害をもたらす」といったような批判がしがしばあり、受け手の側にも「リテラシー」あるいは合理的行動、「冷静な判断」が求められている。

しかし、リスクとは本質的に増幅するものであるという社会学における知見を前提とするならば、リスクを様々に増幅させるマスメディアによる報道や人びとの言説に内包される矛盾もまた「当然」の態度とみなしうるのでないだろうか。

(2) 健康や環境に関する不安言説の強靭さ

不安を説明するためにも解消するためにも、何らかのリスクを説明する科学言説は、今日不可欠なものとなってきている。しかしそれをどのように解釈するか、その仕方は多様であり、そもそも「何を」「誰を」「どの言説を」信頼するのかということと、「科学的に正しいか否か」「リテラシーが有るのか無いのか」ということとは、分けて考察される必要があるのではないだろうか。

さらにまた、ある種の健康・環境リスクにおいては、たとえばポピュラーカルチャーと結びつけてでも「分かりやすさ」の獲得が目指される。このような過程において、場合によってはある種の消費を促進させることによって、消費者としての欲望が喚起されさえる。

しかし一方で、けっしてポピュラーカルチャー等との親和性を持ち得ず、日常生活において話題にすらし難い健康・環境リスクも存在する。この相違はいかなることに起因するのか、という視点から、不安言説の連鎖と強靭さを考察する必要性がある。

2. 研究の目的

以上の背景をかんがみ、健康や環境問題に関するリスク言説構築の過程と構造について「不安」をキーワードとして検証する。また、当該のリスクに関して専門的知識を持たない一般の人びとのこれらリスク認知に関して、他のさまざまな不安と連鎖していることを検証したい。さらに、なぜある種のリスク言説がくり返し使用/消費されているのか、その強靭さについて実証的に明らかにすることを目的とする。

上述したリスク言説に関し、マスメディアの中の科学言説がいかに構築され機能しているのかという点についてもテーマ化し、その社会的機能や今日的説得力、政治的背景についても調査研究の目的とする。

またさらに本研究では、社会学的知見をもとに、「市民」「国民」「視聴者」「消費者」として状況・文脈によって選択的にくくられる人びとの社会的位置づけられ方を確認しつつ、健康・環境リスクや科学的不確実性の社会的意味を論じることの意義を前提としている。

また「科学的にみて不確実なもの」の「分かりやすさ」を目的とした情報加工(リスクコミュニケーション過程)がいかにディスコミュニケーションを生み出していくものであるか、という点について実証的に考察する。

3. 研究の方法

研究期間中をとおして、社会学領域で蓄積されている先行研究を渉猟し、最新の学術的知見を検討する中で具体的に調査設計していく。実証的研究のための分析枠組みを検討し、調査対象者の検討と準備を進め、仮説を構築する。

また健康や環境をめぐるリスク言説に関する海外研究者と積極的に交流し、日本におけるリスク言説とリスクコミュニケーションの特徴(あるいは普遍性)について相対的に把握し知見を深める。

過去に大きな社会問題として報道されてきた健康・環境リスクについて、新聞やテレビの報道を抽出し、収集・整理作業を経て、分析・検討作業を行う。継続的に収集しているテレビ番組の内容分析を精査しつつ、研究期間内において、生起する可能性のある、たとえば鳥インフルエンザや新型インフルエンザといった感染症の国内外の発生や、さまざまな健康リスクに関する報道について、データを収集し質的分析を行う。

健康リスクや環境リスクについて人びとは、どの言説を信頼し、どの言説を信頼しないのか、それはなぜか、また結果としてどのように考えどのように行為選択するのか、と

いう点について明らかにするためにインタビューを行う。個別のインタビューだけでなく、属性ができるだけかたよらないように配慮しつつ、調査モニター会社のデータベースなどを頼りにしつつインフォーマントを集めグループインタビューも行う。

食のリスクに関して「関心の高い」人たちを対象に、集中的に聞き取りを行う。とくに東日本大震災後原子力発電所事故後の放射能汚染により避難することを選択した人びとにも聞き取りを行い、「食」や「健康」に関するリスクについての語りを集める。加えて、各地で放射能汚染の状況を計測する人びとの語りと実践も調査対象とする。できるだけ調査対象者の暮らしぶりに接近するため、それぞれの実践的行動（活動）の場へ足を運びフィールドワークを行うことを前提とする。

いっぽうで「関心の低い」と思われる人びとにもインタビューを行うことにより、健康・環境リスクをめぐる「安全」や「安心」をめぐる、人びとの間にある「分断」について明らかにする。

4. 研究成果

時系列に沿って以下記述する。

助成期間初年度には、文献研究を中心に、実施予定の調査枠組みについて検討しつつ、予備調査として、不安をめぐる科学言説に対する態度および理解の様式を探るべく、東日本大震災に際しての原子力発電所の事故により避難している人びとの、あるいは自ら「市民」と称して積極的に食の安全に関する活動を行っている人びと等の話を継続して聞きつつ、フィールドワークの一環として諸々の市民活動に参加した。

メディアの分析もふまえ、健康/環境リスクをめぐる関心の高低は、先行研究で述べるところの「精神的余裕」「デジタルデバイド」「科学的リテラシーの有無」だけで説明されるのか、という点について実証的データをもとに批判的に検討した。

助成開始2年目には、さらに健康・環境リスクに関する各種の集まりにおいて参与観察を行った。そこで比較的「関心の高い」人たちから不安についての語りを引き出した。具体的には、たとえば各地にある放射能測定所（室）を訪問しインタビューを行った。

健康・環境リスクに関する各ステークホルダーに対する調査の一環として、生産者へのインタビューも行った。具体的には有機農業に従事する人びとにリスクと食についての聞き取りとフィールドワークを行った。

最終年度にあたる2014年度には、5月にモントリオールで開催された *Social Policy and Health Inequalities: An International Perspective* 会議に出席し、国際的視点からの知見を深め、6月にはシニア社会学会「災

害と地域社会」研究会にて、7月にはISAの Thematic Group on Sociology of Risk and Uncertainty のセッション *Emotions, Trust, Hope and Other Approaches to Coping with Vulnerability Amidst Uncertainty* にて、また11月には科学技術社会論学会「知、関係性、消費：食と農の放射能汚染」セッションにて研究報告を行った。

並行して、健康/環境リスクをめぐるテレビ報道のアーカイブスなどを利用した上で分析を行い、日本社会学会誌『社会学評論』にて論文「被ばくの語られ方」を発表した。

その他に、フィールドワークとグループインタビューを継続的に実施しデータを集めた。具体的には、健康・環境リスクへの「関心の低さ」と「階層」との関連に着目したグループインタビューを行った。そこから得られた知見としては、たとえば「何を選んで食べるか」ということについては、科学的リテラシーの有無だけでなく、社会的な要因/属性(バックグラウンド)が影響を与えているということと、不安の連鎖を断ち切るために人びとが選択する方法にはさまざまなものがあるということである。安全とは別に「語られる安心」の考察が重要であるのは、そこに「科学的正しさ」を選択的に支える人びとの知についての社会学的考察が今後さらになされることの重要性について確認できた。

研究期間全体を通じ、主として質的調査を軸としたインタビューやメディア分析といった実証研究を行い、健康や環境に関するリスクを人びとがどのように理解/認知し、生じた「不安」をめぐるどのように対処しているのか/していないのか、資料およびデータを多角的に集めた。

日常生活の中でのリスク認知と対処の方法はさまざまな社会的要因と連動していることの観察をとおして、「科学的正しさとリテラシー」を前提とした「望ましい消費者/市民像」との乖離について考察した。

以上の成果の詳細かつ具体的内容については、以下に記す学術論文や学会報告、著作によって公開している。

今後の展望として、先述した「乖離」が必然的に生じるメカニズムについてさらに考察を深めることは、今後の「リスクコミュニケーション」のあり方を批判的に再検討し、人びとのリスク認知の方法をより深く理解することに寄与すると思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

柄本三代子、「被ばくの語られ方」 テレビジョンにおける『現在』の理解、『社会学

評論(日本社会学会)査読有、Vol.65 No.4、
2015年3月

[学会発表](計5件)

柄本三代子、科学技術社会論学会第13回
年次研究大会オーガナイズドセッション『知
関係性、消費：食と農の放射能汚染』研究報
告：「食の『安全と安心』をめぐる人びとの
知」、2014年11月15日(大阪大学)

柄本三代子、International Sociological
Association, World Congress of
Sociology, Thematic Group on Sociology of
Risk and Uncertainty (TG04):The Japanese
Way of Coping With Vulnerability:
Divisions Among Laypeople After the Great
East Japan Earthquake、2014年7月14日(横
浜パシフィコ)

柄本三代子、シニア社会学会災害と地域社
会研究会研究報告：「ぜい弱性への関わり方
東日本大震災後の分断について」、2014
年6月16日(早稲田大学)

柄本三代子、日本社会学会第85回大会報
告：「不確実な科学言説の読まれ方 健康
/環境リスクと不安をめぐる語りと実践」、
2012年11月3日(札幌学院大学)

柄本三代子、日本マス・コミュニケーション
学会秋季研究発表会報告：「東日本大震災
後の日本人像 震災を取り扱ったマンガ
作品を事例として」、2012年10月27日(法
政大学)

[図書](計2件)

柄本三代子、伊藤守・岡井崇之編『ニュー
ス空間の社会学 不安と危機をめぐる現
代メディア論』、共著、世界思想社、「第5章
新型インフルエンザ・パンデミックへのカウ
ントダウン 繰り返される『冷静な対応』」、
2015年3月、pp.113-142

柄本三代子、長田攻一・田所承巳編『<つ
ながる/つながらない>の社会学 個人
化する時代のコミュニティのかたち』、共著、
弘文堂、「第8章 科学的不確実性と<つな
がる/つながらない>」、2014年3月、
pp.216-241

[産業財産権]

出願状況(計 件)

名称：
発明者：

権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

柄本三代子(ENOMOTO MIYOKO)
東京国際大学教育研究推進機構・准教授
研究者番号：90406364

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：